2007-2008秋冬ファッション

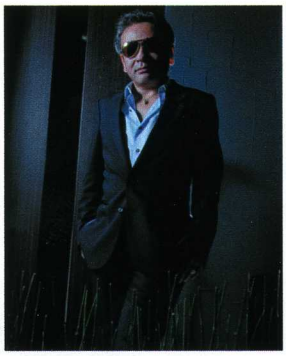
輪舞する前衛と正統

今シーズンも恒例のファッション座談会から特集がスタート。
さらに、一潮流となっているアヴァンギャルドをテーマとしたモード篇、
オーセンティシティが戻ってきたスーツ・コレクション篇という3篇で構成する。
ファッション・トレンドはどうなっているのか?
混迷の時代を探る。

プロローグ: メンズファッション界いちばんの話題をホットトーク!

不確かな創造より、確かな手触りへ。

ファッションの新シーズンの幕開けとして、
全体を俯瞰、評価すべく、座談会を開催。今回は栗野宏文氏が欠席となったが、
河毛俊作、中野香織両氏と本誌・鈴木正文編集長が熱く議論を交わした。
これまで、モード界を牽引してきたエディ・スリマンの今後がアナウンスされない中で、
トム・フォード&ブラウンを中心としたオーセンティックなスタイルが
注目されている状況を分析する。

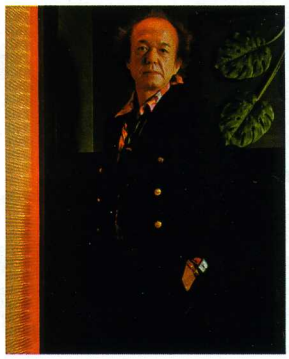


河毛俊作
演出家、フジテレビ・ゼネラルディレクター

連続ドラマが終了したのも束の間、現在は9月2日より大阪松竹座で上演される「蝉しぐれ」の演出を手がける。この日はマルタン・マルジェラの紺のスーツにランバンのシャツ。80年代のレイバンのデッドストックのティアドロップというファッションで登場。

中野香織
服飾史家

東京大学大学院、ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、文筆業に。「モードの方程式」「着るものがない!」(ともに小社刊)のほか、アン・ホランダー「性とスーツ」(白水社)などの翻訳も手がける。男性の服のあり方に鋭い視点でせまる。



鈴木正文
ENGINE編集長

2007年の春夏シーズンはほとんどをショートパンツで過ごす。お気に入りはプラダとブルックス・ブラザースのウィメンズ。秋冬にはそろそろスカートを穿こうかとも考えている(ウソ)。

写真=阿部昌也

2人のトム。

―今回、栗野さんは欠席です。代わりに今シーズンのキイワードをお聞きしてきました。トレンドとしては、引き続きタンジブル、つまり手触り感だそうです。ツイードやレザー、モヘアなど、素材自体に味のあるもの。それが今シーズンの重要なキイワードになっています。色はグレイが相変わらず、人気。ブランドとして、栗野さんが注目していたのは、エディ・スリマンの最後のコレクションとなったディオール・オムです。ツイードやモヘアのセーターという、まさにタンジブルな作品が多く見られました。こんかい、お話をしていただくポイントはいくつかあると思いますが、そのエディ・スリマンの退場。そして、2人のトム。トム・ブラウンの健在ぶりとトム・フォードの超高級ブティックが話題の中心になるのではないかと思います。

河毛　まだ拝見していないのですが、トム・フォードは、ラルフ・ローレン・パープル・レーベルをより高級にした感じでしょうか?

鈴木　近いところはありますが、ラルフ・ローレンのほうが、なんとなく近づきやすいブランドです。トム・フォードはもっと排他的。カッコいいけど、彼のスタイルがすごく強く出ていて、ラルフ・ローレンのようにオープンな感じはあまりしません。

河毛　特徴的なモデルとかコオディネーションはどういうものがあるんですか?　キイワードは?

鈴木　ラインにリージェンシー、ウィンザーという名前がついてます。

河毛　ラルフ・ローレンぽいですね。

中野　幻想としてのイギリスのアッパークラスみたいな?

鈴木　そこはそうですね。ただ、トム・フォードの服は印象が硬い。特にパンツなどは非常に厳密な感じがしますね。ラルフ・ローレンのように他の服とコオディネートする余地はあまりなさそうですね。それだけ世界を限定している。

河毛　トム・フォードのことはグッチをやめてから気になっています。何かのインタビューで、ブライアン・フェリーが好きだと言ってましたね。たぶん、服に対しては口キシー・ミュージックみたいなアプローチだと思います。口キシー・ミュージックのビデオクリップというのは、実は美術などにとてもお金がかかっているんです。彼はファッション界における口キシー・ミュージックでありたいと思っているんじゃないかと思います。非常にクラシックなものにどこかアヴァンギャルドな解釈を新しく付ける。歌はスタンダードだけど、前衛的なキイボードが入っている。そこで自惚れる。全面的にナルシズムが出ている感じです。

鈴木　僕の印象としては、口キシー・ミュージックほど前衛的ではないと思います。たとえばピンストライプのバンカー・スーツをトム・フォード流にテーラードしても、黒いレザータイをすることはない。

河毛　普通の着方をしている。ブライアン・フェリーはタキシードをレザーで作ったりするような人だけど。

鈴木　フォーマルなコートは100年前そのままと言っていいものでした。そのシェイプをトム・フォード的肉体というべきものに合わせたものにしている。先ほどから話にあるアヴァンギャルドさというものに関しては、もし入っているとすれば着る側の体型でしょうか。

中野　着る人の体型を限定するって、前衛というより、傲慢すれすれのスノビズムですか。

トム・ブラウン

トム・ブラウンのコレクションは、以前より「見せる」ショー的な要素は増えたが、基本的にはコンサバティブであることに変わりはない。

レイバン

河毛さんが最近集めている、レイバンのティアドロップ。トム・フォード自らのブランドからティアドロップ・タイプのサングラスがリリースされている。

トム・フォード

服そのものだけでなく、この写真に写っている空間や什器といったものすべてがトム・フォードの世界観。タキシードは非常にオーセンティックだ。

河毛　服そのものにはアヴァンギャルドさというのは入れてこないですね。着こなし方です。実は最近、昔のレイバンのティアドロップにはまっているんですが、そのきっかけがトム・フォードです。あと、トム・フォードが最近着けている時計はロレックスのオール・ゴールドのダイバーズなんですね。あの悪趣味感。あえて、そんな時計をスーツに合わせる。服そのものは、とてもクラシックですけどね。あの服は売れますかね?

鈴木　売れると思いますよ。エスタブリッシュメントなんです。アメリカ東部のスーパーリッチな人たちが平服として着られるというコレクションになっているんですよ。

河毛　マーケティング的には、ラルフ・ローレンのパープル・レーベルなどを着ていた人たちがスライドするということは想像できますが。

鈴木　同じトムでもトム・ブラウンのほうがファッショナブルなエッジが効いてますね。オーソドックスな感じに少しモダンさを加えたデザイン。カクテルドレスを着たところにスウェットを腰巻にするという感じのスタイリングの妙。

河毛　トム・フォードはそういう感じじゃないですね。2人のトムを比べると確かにブラウンのほうがエッジーで、モードとして成立している。トム・フォードはモードではないんですよ。たぶん、ライフスタイルそのものなんです。

鈴木　トム・フォードには気まぐれなファッション性がないんですね。

中野　トム・フォードはやはり、時代を先導しているんでしょうね。もうくるくる変わるファッション性はアウトということを宣言しているように見えます。いまは、みんなクリエイティブなことに飽きていますよね。80年代なんてクリエイティブ・タキシードというのが流行りましたけど、いままた正統なスタイルに回帰しています。先日のカンヌでもブラッド・ピットが本当にオーセンティックな着こなしでした。

鈴木　トム・フォードとラルフ・ローレンは使われているイディオムが似ているのに、どうして印象が著しく異なるんだろうとミラノのショールームで見ながら考えていたんです。

河毛　トム・フォードにはファミリーのにおいがないんでしょ?

鈴木　鋭いですね。そうなんですよ。

中野　エスコートする女性もいない?

鈴木　グッチやサンローラン時代はウィメンズをやっていたけど、フリーハンドになると、コレクションがメンズだけになった。

河毛　あと、夜のにおいが漂いますね。デカダンな夜。

鈴木　トム・フォードのライフスタイル・ストーリーは、その意味で狭いんですね。

河毛　コンサバティブで、深いところにスキャンダルがある。そして、ナイトライフ。仲間と騒ぐナイトライフじゃなくて、孤独。

鈴木　ニューヨークっぽいですね。

中野　トム・フォードのパーソナル・ライフもそこに重ね見てしまいたくなる。

河毛　ラルフ・ローレンはそういう意味で健康的ですね。

鈴木　だから、スクールボーイ・ルックだって成り立つわけです。

河毛　話に熱中してしまってたんですけど、ここまで話をしたデザイナーってみんなアメリカ人なんですけど、それはどうなんですかね?

鈴木　他に見るべきものがないんです。エディ・スリマンが退場したら、エディ・スリマン的なものが急速に輝きを失ってき

た気がします。

中野　ストリートでエディ・スリマン的なものが普通になってきていますね。

鈴木　だから、ファッションとしては終わりなんですね。

エディ・スリマン後。

河毛　ところで最近、僕はマルタン・マルジェラを気に入っているんです。今日のスーツもそうなんですけど。彼は紳士服とは何かということをわかっている。モードブランドにしては珍しく、仕立てもいい。それに、吊るしてあるより着たほうが素敵。あと、レプリカの場合はレプリカだと表記している正直なところもいい。それに、生地もいいですよ。トム・フォードの使うような高級な生地と違った意味で、普通に生地がいい。

中野　いわゆる紳士服ということでは、逆にサヴィル・ロウには迷いがあるように見受けられます。回顧展なんてものをはじめているんですよ。時代にどうついていけばいいかわからないみたいです。ギーヴス&ホークスもモード性を意識したライン、ギーヴスを始めたと思ったらすぐにやめてしまったり。

河毛　ところで、鈴木さんはエディ・スリマンがいなくなったディオール・オムはどう思われますか？

鈴木　エディを越えられない気がします。少なくとも今回のコレクションを見る限りは、エディの持っていた「ある特徴」を局所化してしまっていたというのでしょうか。

河毛　プラダはいかがでしたか？

鈴木　良かったですね。プラダは常に予想外のデザインを出してきます。こんかいも熊のぬいぐるみみたいなものが出てきていましたね。ああいうものを出すブランドはほかにない。ミウッチャ・プラダは独走状態です。あとラフ・シモンズによるジル・サンダーがよかったですね。パリでのラフ・シモンズ自らのコレクションも同じく良かった。プラダとは違うけれど、おなじように未来志向で、その未来が栗野さんの言うところの「手触り感」に満ちている。

中野　日本のブランドはどうですか？

鈴木　僕は、もはや国籍は気にしなくていいと思います。日本の人がいいファッションを作るとか、文化的な発信をしなければいけないとかいう話はあまり意味をもたないとおもう。

河毛　僕は日本には、デザイナーなんかいらないと思います。でも、世界でいいデニムといえば、日本でしょ。そういうことでいいと思います。そういうのがクールなんじゃないですか？　日本人は服を着てたかだか２００年です。彼らは１０００年とかそれ以上です。洋服というあり方そのものが西洋人のためのものなんです。

卵とシャンペン。

鈴木　ところで、みなさんが注目しているデザイナーやブランドは？

河毛　さっきも言ったようにマルタン・マルジェラ。それからバレンシアガが安定感があると思います。あと、地味ですがプリングルもデザイナーが変わって気になってます。

中野　そういえば先日、アルマーニの伝記が出たんですが、あの人って仕事の喜びのためなら自由時間などいらないというんですね。昨日より今日より１センチでも高くという。

鈴木　依然としてイタリアの男性はベスト・デザイナーはアルマーニだと思っていると思いますよ。クラシコ・イタリア系以外のエスタブリッシュメントはアルマーニを着ていますね。

河毛　そういう人たちにミニマルな服は難しいですよね。トム・ブラウンなんかゴージャス感がないし。

中野　丈が足りなかったんですか？　みたいな話になる。

河毛　グッチは？

鈴木　グッチはトム・フォード時代に欠落していたものを全部出そうとしています。昼間の服です。僕が注目しているのは、ミウッチャ・プラダとラフ・シモンズ。ラフ・シモンズはパワフルですね。

河毛　あのミニマル感やクリーンさが自分の「汚れ」にフィットしていないと思いますけどね。

鈴木　デトックス・ファッションと言うのがあってもいいと思いますよ。さて、このあたりでシメにしたいと思うのですが、これからの展望などを語っていただけませんか？

河毛　白洲次郎さんの娘さんが書かれた料理の本に白洲さんが亡くなる直前のエピソードが載っていたんです。大きなオムレツを食べながらシャンペンが飲みたいとおっしゃったそうです。

鈴木　お洒落としか言いようがない。

中野　いろいろ経験をつんで、「わかっている」男性にしか許されないお言葉。

河毛　００７の中でもボンドが女性を誘うのに、スクランブルエッグを食べてシャンペンを飲もうというくだりがあります。シャンペンと卵料理という共通点。男は卵が好きです。

鈴木　タンジブルなものですね。

河毛　無理やりまとめるようですが、オムレツやスクランブルエッグのような服はカッコいいんじゃないかと思うんです。トム・ブラウンやトム・フォードもそうかもしれない。ひねった素材のなんだかわからない料理よりも、本当においしいオムレツやスクランブルエッグのような服がいいのではないかと思います。

鈴木　「金あるだろう」ルックというんでしょうか、ラグジュアリー・ファッションの時代は、今度の秋冬が最後だと思います。高くても「金あるだろう」的ではないものへ。以前流行った穴の開いたジーンズとかではなく、もっと実直なものですよ。

河毛　男の服は道具だと思います。女性の服は絵画であって欲しいけど。

中野　いま、女性の飛びついている服も道具ですよ。

河毛　あれはやめて欲しいんです。いていけないとは思わないけど、みんながみんなそうだとね。多様性といいながら、多様性を認めていない社会なんじゃないかと思う。

中野　構造改革といいながら、大きなものしか残らない社会になっているから。ファッション・ブランドも統合されて、あのブランドは結局あのブランドと同じグループかと思って、みんな一緒に見えてしまいますね。

河毛　トム・フォードは何かそうじゃないことをやりたかったんでしょう。

中野　土俵の違うところに行きたかったんですね。

ラフ・シモンズ

ここ数シーズン評価がうなぎのぼりといえるのが、ラフ・シモンズ。研ぎ澄まされて、よりクリーンな印象を与えるデザインになっている。

ディオール・オム

世界中から注目されたエディ・スリマン最後のディオール・オムのコレクション。これまでになく素材感が前面に出た「タンジブル」な内容。

プラダ

独走状態のミウッチャ・プラダはまさに熊のぬいぐるみというべきアイテムを登場させた。こんなデザインは他のブランドではないだろう。

グッチ

グッチのコレクションは70年代のスキーウエアを思わせるような「山小屋」ファッション。フリーダ・ジャンニーニが健康的なイメージを作り出している。

ゲイの美学の終焉。

私はすでに来年の春夏コレクション、つまり今回のテーマのさらに先のシーズンまで見ているわけです。それを踏まえて申し上げると、まず、タンジブルというキイワードの継続があります。少し先走りますが、次の春夏のラフ・シモンズがすごくいいコレクションでした。タイトルが「マテリアル・ワールド」。みんなバーチャルなパソコンの世界に浸りすぎているから、そこから一歩外へ出て「実際のものに触れてみようよ」というテーマです。プレスリリースの中にもタンジブルという言葉がありましたね。あと、来春夏はもっとプレッピーになります。誤解を恐れずに言えば、この10年くらい続いたゲイイッシュな流れは一旦終わりですね。少なくともゲイの人々の美学が時代の最先端をリードしていた感じではなくなったかな、と。

宣言しておきますが、僕はアンチ・ゲイやゲイ・バッシング派ではありません。この、ポスト・ゲイな流れは、タンジブルなものや、ピュアなものとしての少年ぽさという形で現れてくると思いました。

ところで最近、日本やアメリカのテレビや映画に子供とか教育をテーマにしたものが増えています。河毛さんもかかわっていらっしゃいましたね。子供たちの将来を考えないといけないという流れでしょう。去年までのファッションは「俺様」な感じで、俺様が最高に気持ちよければよく、昔の独身貴族みたいなことは最高だった、という感じです。そうではなくて、THIS GENERATIONやNEXT GENERATION、今日のことや明日のことをちゃんと考えようという流れになっていると思います。

今年の春夏はフューチャー感というのが大きなキイワードだったけど、来年はもっと踏み込んだ内容です。未来を考え始めた。こんどの秋冬は未来へ向かって一歩踏み出すために自分のいる場所にちゃんと地に足をつけている。不透明な未来に対して、自暴自棄とか自分勝手にせず、ビジョンを持とうとしている。

エディの功罪。

トム・ブラウンがトラッドなものがいま一番カッコいいと言い切ってしまったということはすごいですね。それはコンサバティズムでもないし、コンサバに戻ったというわけでもない。幸いなるかな、男の人には戻れる場所があるんです。トムが戻してくれた場所。トム・フォードもある意味では戻しているとは思います。どっちかというとトム・フォードは独身貴族ぽい。今版グレート・ギャツビーでしょう。贅沢も見直されているかもしれない。贅沢といっても地に足がついている。カシミアやツイード、そしてファーとか。マルジェラでさえファーをやってます。

河毛さんがマルジェラを気に入っているという話をされていましたが、もうひとつのキイワードはインテリジェントということですね。トム・ブラウンもそうですが、マルジェラは一番インテリジェントだと思います。賢いことは大事なんじゃないでしょうか？　少し前は、馬鹿っぽくても良かったんですが、もう少しものを考えようと。マルジェラは自分が正直で、フェアで、前向きでいようとする。元ネタがあればそれをちゃんと公にして、ユーモアで包む。ユーモアというのはインテリジェントな行為ですからね。

ところで、話題になっているエディ・スリマンなんですが、どうやらカール・ラガーフェルドと非常に近い位置で仕事をするようですね。彼の功罪は、男のナルシズムを正々堂々と良しとしたことです。ゲイでもないのにお洒落な男性がこんなに多い国は世界中に日本しかないです。エディがウケる素地は日本にはありました。そこに登場したエディ・スリマンは細い、しかもナルシスト。日本人に合わないわけがない。

そして、後追いするように欧米では痩せてまで彼の服を着ようとする人間が現れたし、メトロ・セクシャルという言葉まで生んだ。革命を起こしたと言っていいでしょう。私がフランスでいつも泊まっているホテルの近くにボン・マルシェというデパートがあります。最初にディオール・オムを置いたデパートです。そこで、フランスにもこんなやつらがいるのかという発見をしました。お母さんと一緒に買い物に来る坊ちゃんがたくさんいるのです。ヨーロッパ人のメンタリティからするとありえないと思っていたんですけど。「僕たちのブランドだ」と発見したんじゃないですか？　育ちが良くて、新しくて、きれいに見えて、親も納得してくれる。でもロック・スピリットもある。そういう意味で、フランスのブルジョワジーにとってポジティブ・イメージなんでしょう。

ディオール・オムもエディが辞めて、クリス・ヴァン・アッシュが跡を継ぐ訳ですが、現段階では、この先どうなるのかという答えが出せないですね。先日の春夏コレクションはまだ2ヶ月程度しか時間のない中で作った試し刷りのようなものですから。次の秋冬で答えが出ると思います。ただ、前回の座談会でエディの服を着ていた人が、トム・ブラウンに流れると鈴木編集長が仰ってましたが、そうはならないと思います。イデオロギーが違いすぎる。

トム・ブラウンの服って細いけど大きいのです。着ると無理だと感じると思います。アメリカという国の中での美意識の高い人のための服なんですよ。さきほどから話に出てきている2人のトムは、くしくもアメリカ人ですが、もしかするとコンサバティズムとマッチョイズムというものが関係あるのかもしれませんね。2人ともゲイだけど、コンサバでマッチョな国のゲイ。トム・ブラウンはかなりコンサバだし、トム・フォードはビジネスマンですから。

今シーズンの方向性は？

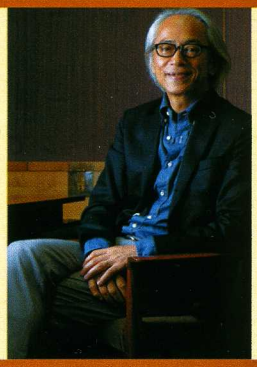
今年の秋冬コレクションで「ファッション」として面白かったのはジョン・ガリアーノとコム・デ・ギャルソンでした。ジョン・ガリアーノのショーには侍、忍者、犯罪者、ネイティブ・アメリカンが登場。振り切れた世界観でした。ファッションが本来持っている馬鹿馬鹿しいファンタジーのようなところまで来ている。コム・デ・ギャルソンはファッションの究極としての個人主義。

今シーズンをまとめると、大枠でのコンサバティズムがあって、服自体はボタンダウンとかローファーとかプレーントウとか3つボタンとかいう方向に向かっていく。その中でトム・ブラウンのようにオーソドックスが一番カッコいいという人もいる。そして、トム・フォードのように男の究極の贅沢は一枚のシャツをオーダーで作ることなんじゃないのというところに戻る人がいる。そして、もともとファッションを面白くしようと思ってやってきたジョン・ガリアーノや川久保玲さんのようにファッションってもっと振り切ったものや個的な面白さを極限まで出したものじゃないのかと提案したのが今回の秋冬だと思います。

「カッコいい」服の基準が変わった!

栗野宏文の視点。

今シーズンのコレクションはどうだったのか？
そして、どういう方向に向かおうとしているのか？
ユナイテッドアローズの栗野さんに
トレンドを扱う立場から語っていただいた。



栗野宏文

ユナイテッドアローズ・チーフクリエイティブオフィサー。今回の座談会には参加できなかった栗野さん。改めてお話を伺いにいった当日は、最近お気に入りのディストリクト別注のシャツで登場。ボタンダウンでありながらタブカラーという遊び心がキモ。